

●インタビュー 飛驒の里山から世界へ クールな田舎をプロデュース

株式会社 美ら地球 代表取締役 山田拓

4

飛驒里山サイクリングの舞台は、一見、全国のどこにでもありそうな田んぼの広がる田舎でした。なぜそこに連日、多くの外国人観光客が訪れ続けているのか。ツアーを催行する株式会社美ら地球の代表取締役山田拓氏に、ツアーの特徴やその背後にある想い、そして日本の農山村の今後の可能性について語っていただきました。

世界の旅を通して 見えてきたもの

——山田さんは世界一周の旅から帰国した後に飛驒里山サイクリングのツアーを始められたそうですね。まずはそのきっかけについて教えてください。

ださい。

大学を卒業後、コンサルティング会社に就職し、東京やニューヨークで働きましたが、30歳を前に「より広い世界を見たい」と妻と2人で世界一周の旅に出ました。その旅では、南米やアフリカの地方部などを中心に巡り、その土地ならではの暮らし・風土が残っている光景に感銘を受け、自分たちも日本へ戻ったら地方部、いわゆる田舎に住みたいと思うようになりました。

そして帰国後、縁あって現在住む飛驒古川に家を構えることとなり、この地でサイクリングツアーを始めることになります。

——世界に旅に出た時点で既に「田舎」を志向していた。それはどうし

てですか。

会社員時代は東京やニューヨークで暮らしていたわけですが、都市の暮らしが今後ずっと持続可能だとは思えません。未来も含めて持続可能な形、その可能性は田舎に残されている、そうした想いがありました。世界を回る中で、その想いは実感となり、帰国後は自分たちも田舎での暮らしを実践していくことになりました。

自転車の速度で 地域に触れる

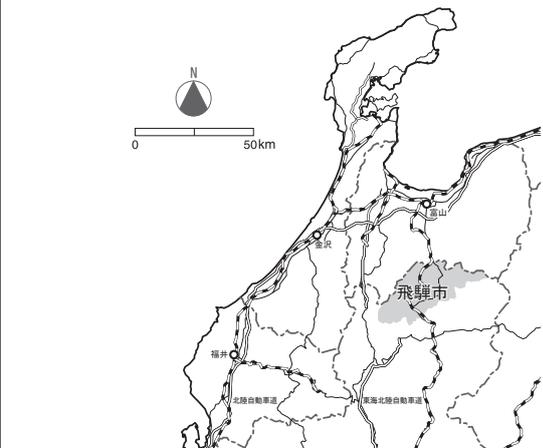
——では次に、サイクリングツアーの概要を教えてくださいませんか。

農村の風景を楽しみながら、ゆっ



ツアーで通る道は、町の人々の生活道路でもある

図 岐阜県飛騨市の概要



総面積	792.53km ²
人口	25,154人 (2016年12月1日現在)
産業別 就業者数	製造業 (3,006人)、卸売業・小売業 (1,903人)、建設業 (1,392人)、医療・福祉 (1,366人)、農業 (1,107人) など
主なアクセス方法	飛行機 <ul style="list-style-type: none"> ・羽田空港～富山空港 約1時間 ・富山空港～富山駅 [富山地方鉄道 (バス)] 約25分 ・富山駅～飛騨古川駅 [JR特急ワイドビューひだ] 約1時間15分
	JR <ul style="list-style-type: none"> ・東京駅～富山駅 [JR新幹線かがやき] 約2時間15分 ・富山駅～飛騨古川駅 [JR特急ワイドビューひだ] 約1時間15分
	自動車 <ul style="list-style-type: none"> ・調布IC～松本IC～飛騨古川 約6時間5分
観光資源	<ul style="list-style-type: none"> ・古川祭り、三寺まいり、きつね火まつり、飛騨神岡祭、飛騨新そば祭りなども伝統行事 ・天生湿原、板倉の宿 種蔵、天空の牧場 山之村など美しい自然 ・飛騨地方が舞台モデルとなった映画『君の名は。』の聖地巡礼
観光客数	1,087,552人 (2014年度)

資料：平成22年国勢調査結果、平成26年度飛騨市統計書および飛騨市ウェブサイトなど

くりとしたペースで巡るガイド付きのサイクリングツアーになります。現在、2つのコースがあり、スタンダードコース(7300円/人)は3.5時間で全長22キロ、ハーフコース(4700円/人)は2.5時間で全長12キロを巡るコースになっています。砂利道もアスファルトも走りやすい自転車を使用し、ツアーに出る前にきちんと練習をしてから出発します。初心者でも安心して参加

いただけます。経験を積んだガイドが里山に広がる文化・歴史を丁寧に案内し、季節ごとの農村のありのままの美しさを肌で感じていただける点がこのツアーの特徴です。おかげさまで旅行者用口コミサイト「トリップアドバイザー」でも90%以上の参加者に最高評価の5つ星をいただいています。——ツアーに参加されるのはどのような方が多いのですか。

参加者の約7割が外国人観光客、残りの約3割が日本人観光客となっています。外国人の内訳は欧米やオセアニア、シンガポール・香港などを中心にこれまで約70カ国以上から幅広い受け入れの実績があります。外国人と日本人でツアーを分けることはせず、両者が交ざる際は日本語と英語の両方でガイド・案内をしています。かえってお互いに交流でき

ているようです。——私も先日、ハーフツアーに参加させていただきました。ガイドの方の説明があると、見慣れていると思っていた農村の風景がまた違って見えてきて、まだまだ自分も日本を知らないなと気づかされました。ツアーにおいてガイドの役割は非常に重要です。飛騨里山サイクリングも開始当初は、農村のきれいな風景を見せることに主眼を置いていました。しかし、風景を眺めるだけならお客様だけで巡っても同じだということに気づきました。以降、「暮らしを旅するガイドツアー」をキャッチコピーに、ガイドが説明することで、この風景を舞台にどのような暮らしが営まれているのか、地域の人どのような想いがあるのか、を参加者が感じられるようなツアーになることを心掛けてツアーを実施しています。特に高い評価、人気をいただけるようになったのもその頃からのことだと思います。——町の人たちとの触れ合いも魅力の一つになっていますね。はい、すれ違う町の人たちが皆あ

いさつをしてくれる、時には長々と立ち話が始まってしまふ、畑で取れたモノを分けてくれる、農作業のちよつとした手伝いをさせてもらえる、そうした交流の一つ一つも多くの参加者に喜んでいただいている要因となっています。

——通りがかった中学校の校舎の窓から子どもたちが鈴なりになって笑顔で手を振ってくれる。外国人観光客にとって、こんな嬉しいことはないですよ。

そうですね。ただ、これらは決して「仕込み」ではありません。町の人たちとそうした関係を自然な形で築かせていただいた、これは本当にありがたいことだと思っています。

地域のキャパシティに配慮する

——ツアーを開始した当初は、見慣れない外国人の姿に町の人も驚かれたのではないですか。

今までほとんど外国人が訪れることのない地域ですから、やはり初めての頃は驚かれたのだと思います。



すれ違う町の人たちとの会話も魅力のひとつ

す。一方で、今ほどの人数がいきなり来たわけではありません。徐々に数を増やしながら時間をかけて今の規模にまでなってきた。その意味で町の人たちも徐々に慣れてくださるようになります。

——地域との付き合い方の中で、特に気をつけていることはありますか。

地域のキャパシティを超えないようにすることですね。ツアーで通る道は、基本的に町の人も生活で利用する道ですし、狭い路地も通る、住宅の前も通る、ということ、たとえツアーの需要があったとしても、

無計画にツアーを増やしてよいものではありません。また、1人のガイド当たりの人数を8人までに抑えるなどの配慮もしています。その上で今のツアーの状況は果たして地域のキャパシティを超えていないのか、ツアーを実施する自分たちで振り返ると同時に、地域の方々にもお伺いしながら検証しています。

また個人レベルでは、飛騨古川に住む一住民として、町の人とともに、誠実に地域を大切に暮らしをしていくことも大事なことであります。これは当たり前なことではありませんが。

——それは会社をまとめる立場の山田さんのみならず、ガイドや店舗のスタッフにとっても大事なことと言えそうですね。

はい。基本的に皆、地域との付き合い方は自分たちで理解できる人間たちですが、あえて口に出して注意することもあります。また、地域と真摯しんしんに向き合える人材かどうか、そうした人間性を見ることは、採用の際にとっても大事にしていることでもあります。

——ところで、山田さんが講演やインタビューの場で使う「4つのHappy」という言葉、とてもすてきだと思っています。改めてお話を聞かせていただけませんか。

私は、観光を単なる商売とは捉えていません。正直言って、稼いだけなら都会を離れないほうがよかったですし、観光を仕事に選ぶ必要もなかった。それでも飛騨古川に住んで観光業に関わっているのは、観光によって地域を豊かにするためです。「観光で商売するために地域を使う」のではなく、「地域を豊かにするために観光を使う」、これが基本にある考え方です。

観光で地域が豊かになると、4つのHappyが地域の中に生まれます。それが、1. 旅人のHappy、2. 地元企業のHappy、3. 住民のHappy、4. 若者のHappyです。観光客の人数だけがが増えても地域にとっては何の意味もない。観光に関わる者として、自身の商売の成功だけでなく、責任を持って地域にHappyを生み出していく、そうあることが大切なのではないでしょうか。

世界の田舎を クールにしたい

——サイクリングツアーから始まり、今は古民家滞在や食文化体験など、プログラムの幅を広げていってほしいです。今後の展開についてお聞かせください。

これまで飛騨里山サイクリングを中心に実施してきて、3年前にサイクリング以外のコンテンツも加えた「SATOYAMA EXPERIENCE」に名称を変えてきました。その理由もやはり、サイクリング以外の需要を喚起し、交流人口を増やしていくことで、より地域経済に貢献したいという思いがベースにあります。

サイクリングのできない冬場に行うスノーシューを使った山歩きや、古民家を使ったロングステイ、里山の食に触れる文化体験などを展開しています。まだサイクリングツアーほどの集客規模にはなっていませんが、参加者からは高い評価をいただいていますし、あと3年くらいのスパンの中で事業として成り立つ形に持っていきたいと考えています。

——その中で、東京オリンピック・パラリンピックもある、2020年についてはどのように捉えていらっしゃいますか。

2020年(平成32年)の東京オリンピック・パラリンピックは一つの区切りではありますが、あくまで通過点と捉えています。日本の文化が好きで、特に地方部に訪れているような外国人観光客は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックが過ぎたからといって減ってしまうことはないでしょう。

株式会社美ら地球としては、2020年で立ち止まることなく、その先へ進んでいきたいと考えています。これまでは、「クールな田舎をプロデュース」のコンセプトの下に、「飛騨地域をクールにする」ことに取り組んできました。そのことは今後も続いていきますが、2020年に向けては、より舞台を広げて、「日本の田舎をクールにする」こと、そして2025年(平成37年)に向けては、「世界の田舎をクールにする」ことを目標に取り組んでいきます。



どのような暮らしが営まれているのかが感じられるツアーを

旅行はある意味ぜいたく品の側面もありますし、都市住民のほうが生活に余裕があることが多いことを考えると、普段と違う環境に身を置きたい、そうした場所に訪れてみたいといった旅行ニーズの先は、おのずと地方部になってきます。田舎、農山村のデザインেশョン(旅行先)としての可能性、価値はとも高いいと感じています。また、美ら地

球でこれまで取り組んできた「その土地の暮らし・風土を感じる」ということができるツアー」を作り上げる手法は、飛騨地方でしかできないものではなく、普遍的に展開が可能なものと考えています。

——なるほど。山田さんは飛騨で暮らす飛騨人でありながら、グローバルな視点は忘れない地球人でもあり続けていらっしゃいます。そのバ

ランスがビジネスにおいても重要な
のですね。

インバウンドビジネスを成功させるには、一定程度の国際感覚は必要なのではないでしょうか。それこそ田舎は世界中どこにでもあり、世界中が競合先となる中でお客様を自分の地域に連れてこなくてはならないわけです。しかも、国内の観光地は団体客の受け入れで成り立ってきたこれまでのスタイルからいまだ脱却できていない。そうした中では、海外も含めて地域の外を知っている、そして観光以外の分野を知っている自分の視点は、地域にとって役に立っているのかなとは思っています。

日本の農山村に必要なものは意志

——インバウンドブームとも言われる今、観光振興に取り組んでみたいと思う農山村は全国に多いと思います。最後に、そうした地域へのアドバイスをいただけますか。

日本には他の国にはない、歴史・文化の重厚な蓄積があります。そし

て、農山村には、それらが暮らしの形として具体的に残っている。農山村は、日本のリアルが感じられる、観光振興においては可能性の宝庫だと思っています。

地域の資源を活用した、いわゆる着地型コンテンツはこれまでの日本人相手の観光では成立しづらかったかもしれませんが、インバウンドは全く別と捉え直すべきです。世界には、日本の農山村の資源の価値を認めて、対価を支払ってくれる人たちがたくさんいます。取り組む意志さうことではありません。

——取り組みたいと本気で思う気持ち、それが大事だということですね。

はい。私は「地域の意志の総和」が重要だという話をよくさせていただけます。一人で取り組んでも、地域が変わることは難しい。新たなことに取り組むたい、そう考える人たちの意志の総和が、地域を動かすくらいの塊になるかどうか、そこに地域の未来がかかっています。今後、今以上の過疎が進んできた時、その時にはもう手遅れになってしまいか

もしれません。だからこそ、今動く必要があると思います。

——地域がまとまるためのヒントは何かあるでしょうか。

自分たちの地域が将来どうなりたいのか、地域の将来像（ビジョン）を考えるにあたって「あの国のあんな町になりたい」などと具体的なモデルで考えるとよいと思います。世界の田舎には優れた観光地がたくさんあります。ただ真似するということではなく、他地域の良いところを「活かす」視点が重要です。そうしたモデルが共有できれば、あとはそこに自分たちがたどり着くために、何にどう取り組むべきかが戦略的に考えていきやすくなります。

また、取り組んですぐに成果が出なくても、諦めないことも大事です。着地型のコンテンツにマーケットがついてくるまでには時間がかかります。にもかかわらず、すぐにやめてしまう地域が多いことは残念に思います。

観光が地域社会に果たす役割は非常に大きいと思います。単なる三次産業の一部として観光を捉えるの

ではなく、地域の広告塔として、そして地域経済のフロントエンジンとして観光産業が位置づけられるよう、美ら地球でもさらに取り組みを続けていきたいと思っています。

——ありがとうございます。

聞き手・観光地域研究部 中島泰



山田 拓 (やまだ たく)

奈良県生まれ。横浜国立大学大学院工学研究科修了。外資系コンサルタント会社退職後、足かけ2年29カ国にわたる放浪の旅に。2007年、飛騨古川（飛騨市）に株式会社美ら地球（ちゅらぼし）を設立。里山や民家などの地域資源を活用したツーリズムを推進中。2013年、地域づくり総務大臣表彰。総務省地域力創造アドバイザー／内閣官房 クールジャパン・アンバサダー／（一財）都市農山漁村交流活性化機構 国際グリーン・ツーリズムアドバイザー／NPO法人 日本エコツーリズム協会会員／NPO法人 日本民家再生協会友の会会員